J

夫馬 基彦

の家のリビングに一枚の絵がある。

図柄だった。 茄子の木が淡く微かにあって、 とした無象とでも言いたい画面なのだが、そこに唯一、 た青が濃淡微妙に流れ展び、 濁りをまじえてひろがり、中央部から斜め上方にかけては薄緑色で重ね塗りしてぼかされ 一色、といっても真ん中から右手にかけては濃紺の、さながら淵のような部分が二ヵ所あ い茶色のサイドボード 下三分の一ほどには薄白の靄がかかった水辺ととれなくもない藍色がいくぶんの 上に白壁を背に載せてある三十号の油絵で、 というふうで、 その一枝に一個だけまだ小ぶりの茄子がなって つまりは殆どが形定かならぬいわば青を基調 真ん中よりやや左斜め上に一本の 画面全体はほぼ青 いるという

は薄緑色に白っぽく、 ている。 茄子は茎から蔕にかけては黒っぽい濃紫色で、 そこから先は青紫からいわゆる茄子紺色へとしだいに濃く丸く描か そし て蔕から実が伸びだす境界線 あ た 1)

らひっそり大人しやかに静止している印象である。 曖昧さに己れ自身を溶かしこみたがってでもいるかのように、 いるのかといえば、けっしてそうではない。どころか、 に一切が収斂している感がある絵なのだが、ではその茄子はいかにもあざやかに描かれて ゆえに、 画面全体はやはり青が主調であるばかりか、 その一つの小さな茄子とそ むしろ茄子自体も周囲の茫漠たる みずから艶を消してなにや の

花瓶を置いた。 私はこの絵に合わせてソファセットも紺色のものを整えたし、置き場所も四ヵ月前、 越して八ヵ月少々のまだ新しげなリビングでも、この絵は確実に焦点の一つとなって いているのだが、 だからといおうか、私はこの絵には格別の額装なぞはせず、 ディオセット そのシンプルさが絵の内実と照応してなかなか似合っている。 脇から今の所へ移し、 絵の前にはやはり紺色の大皿とブルー 木枠だけの簡易装のまま置 のイタリア いる。 黒の

見えな なかっ の井戸を持っているという言い方があるが、 淵の前に自分を置くような心地がするのだった。あるいは人間は誰もが自分の内部に存在 見たことになるが、 おかげでこの絵は、 たりすれば、 時折はふと、 印象はおおむね変らなかった。 ずい ぶんさまざまな角度、 少なくともその周りでたたずんでみたくなる、 その井戸が汚れすぎていなかったり涸れて さまざまな光の具合、 いつも静謐で、 シンとし、 さまざまな気分で その どこか深い

水にとりまかれているような心持、 そしてそれが実は自分の日常といつも表裏一体にあ

ると感じている者の持つ孤独、そんなものが伝わってくる気がする。

この絵の向うにはいつもひとりでじっと身近な茄子の美しさを見ている人がいる、 だけでいいのかもしれない。 いや、ひょっとしたらそんな言い方をする必要はないのかもしれない。もっと直接的に、 と言う

事実、この絵には白封筒入りの一枚のパンフレッ 写真とともにこんな句が一つ載っている。 トがついており、 そこにはこの絵の力

秋茄子と 遂に身の香を ーにせり

敏雄

そっと返すと、 これは絵の作者ではなく、その友人である専門俳 こんな文字とともに出てくる。 人の作だが、 画家自身の名は絵の裏を

茄子

九七四年

田所泰夫

れは絵描きらしい美意識の現れでもあるし、同時にいくらか自己主張も感じさせる。 であるのを嫌ってか、最後の四画目を「丈」 いずれも中々うまい端正な書体だが、「夫」の字だけは姓名四文字中の三字までが左右対称 茄子という字は大きく、 年号はだいぶ小さく、 の字のように左に少々はみださせてある。 名前はその中間くらいの大きさである。

う十九年も前と知れるわけだが、しかし私はこの絵を勝手に秋茄子の絵と呼んでおり、 いずれにせよ、 この書き入れによって絵の正式タイトルは「茄子」であり、 制作年はも

許へ置くようになったのもつい昨年からのことにすぎないのである。

2

東京世田谷の私鉄の小さな駅に降りたった。 その昨秋、十月初旬のある日曜日の午後、 田所さん宅を訪ねるためである。 私は紙袋入りのウイスキーを一本ぶらさげ、

ち 本日定休日」と墨のよく見えない木札のぶらさがった酒屋の前でしばらく人を待ったの 駅のまわりは山の手下町とでも呼びたくなるこぢんまりとした商店街で、 やって来た自転車の主婦に道を聞いてぶらぶら歩きだしたのだが、 道の片側には秋祭 私はその角の

気配が に違いすぎたからかもしれな 私はなんだか少年時代の田舎町へでも来たような気分だった。地名から連想する住宅街的 でもあるのか祭禮という字の浮き出た小提灯が時折ポツポツとさがっ まるでない めと、 つい直前までい い。こちらは車もめったに通らず、 た娘の中学校運動会場の若い まるで静かな 躍動や喚 ているせいもあって ゆのだった。 声とあ

とすぐアトリエだった。 ぼっていく ンクリートか石組の上をしばらく見上げて見当をつけたのち、だいぶすりへった石段をの ん自身が「やあやあ」と招きい いからだ。 田所さんの家はその道の先の右側にあった。 けのため、 · のである。 古い合板張りのド 田所さんの家も手前一、二軒ともどもかなりの高さにあり、 見当づけが必要なのは、下では れてくれた家は、こぢんまりした平屋で、 アの前でベルを押すと、 向う隣が樹の繁ったどうやら小高い台地状 表札もなく誰の家なのかよく分らな 待っ τ ίÌ たように声がし 居間 苔のはえたコ をつっきる で田 所さ

二つ向うむきに立てられていた。 型三段木棚には絵の具や絵筆類と並んでやかんとソーダ硝子製の何かの壜がい バスが奥と左のだいぶ汚れた壁際からぎっ その十五、六畳分くらい そして中央部に古びたストー もう一つ別の画架などが置かれ、 の長方形のアト ブや、 そのかたわらに、三十号ほどの古キャ つだけ真っ白な十号ほどのキャ しり重ね立てられ、 リエには、 被いをかけた百号二百号の古キャ 入口側のちょっと傾い ンバ スを載せた くつかあっ ンバスが た箱

大型ポットから土瓶に湯をそそぎ、ちょっとぬるめの茶をいれてくれ 窓際の 小さなテー ブル の前にかけると、 大柄な田所さんが取っ手の蝶つ た。 が L١ の ゆる h だ

「まあ、 あそのとおりだけど、 していたんだけど、 こんな所ですよ。これでも戦後しばらくして建てたときにはそれなりに小ざっ なにしろ四十年たったからねえ、 まあしようがないよねえ」 ごらんの通りです。 殺風景っ て 言

つ たことだから、 そう言った田所さんの目は少ししばたたいていたが、これは今までにもちょ さほど気にする必要はな ιį しかも発言内容はそのとおり で くちょ あ

悪くないですよ、落着いて静かだし。それに庭がいいじゃ ありません か

私は田所さんの目を誘うように、 視線も体も庭に向け た。

根程度だけど。 草と言ったかーメー が敷かれ、 気もするが見晴らしはしごく ぞになっているのだろう、真っすぐ横一直線にすっと切れてい 文の低 庭は四坪 地と境界をなす長辺にはどくだみと一、二の雑草、 の出来てい い茄子の木が一本、 手前を除く三辺の縁寄りにだけちょっとした植物が生やしてある。 ·ほどのきっちりした長方形で、 庭の中央部には寂びたというか古びてところどころ緑色がか そうなひまわりなど園芸種二、三といった具合だ。 トルほどの細く伸びた茎先に半枯れの紫紅色の花が円錐状につい いり 向う側短辺にはベゴニア ただし、 向う端はそのまま下から見たときの石組 道路の向うに見えるのは平凡な木造民家の屋 が一列、 それに枯れた葉が一 ζ そして左辺には ちょっと危 枚だ け付 右手、 ない た った玉砂利 か花魁 ような か ίÌ たも 7 神社

ほう、 私が何枚かの絵を想い浮べ微笑みながら右辺に目をやると、田所さんも同様にしながら やっぱりここが田所さんの取材源ですね。 茄子もあるし、どくだみもある

はは、 まあね。 こうしておくと、 いながらにして全部済むわけだ」

なるほど。ということは辛夷 や椿もなけりゃならんのだけど...」

かない。 そう言って私は視線をきょろつかせた。 といってもこの庭では、 探す先は隣の神社側

よく一枝こちらへ突き出ているのがどうやら辛夷で、 すると、 やはりあった。 花はもちろんないけれども、 その少し右が椿だ。「あったー」 樹木群のなかからちょうど枝ぶり

私が声を上げると、田所さんも、

「 はっは、分りましたか。貧乏症のバレもとだ」

と楽しげに笑った。

しかし、 茄子はもう実もないんですから抜いたっていい んじゃないですか」

いや、だけど、まだ葉っぱが付いてるでしょう。老残の、 枯れ縮んだ、 哀れな葉っぱが。

あれを抜くには忍びんでしょう」

「ええ、まあ」

私は田所さんの大柄だがしかし昔に比べればすっ かり萎え縮んだと言って L١ ١١ 顔や手の

甲を見ながら、ちょっと返事に困った。

フフフ」 「それにね、またそこがいいんだよ。 その、 ١١ つ枯れ落ちるかという微妙なあ わ が

私は田所さんの含み笑いを聞きながら、少しほっとした。

を嬉しそうに指さした。 をちょっとだけやるとかね」 じゃ、その茄子の話が出たところで、絵の方のこと片付けましょうか。 頷いた私の顔も多分ほころんでいたのだろう、 ウイスキー 田所さんはそう言って、私が持参した机上のウイスキー は確かに私としてもいささかはりこんだ上物だった。 田所さんはニヤッと笑うと、 で 立ってアト あとでこれ

エの中央へ行った。

に向け、

そうして、

向うむきにしてあった三十号のキャ

ンバスの一

つを取ると、

くるっとこちら

「これだろ?」

とまじめに戻った顔で言った。

それは例の茄子の絵である。

「ええ、そうです」

秋茄子

と目をやって、 私は隣にもう一枚同じ号の作品が用意してあるらしい すると田所さんはその私の気配を感じたのか、 茄子の絵を持ったままそっちの方へちょ のを少し気にしながら、

きっと。 で田所さん二年ぶりの個展がオープニングしたのである。 酒を飲んでいた。 う 違いなく見ているはずであり、 実に十六年たって同じ絵を出したわけである。 展というのは二年前十年ぶりのものである。 「そうか、 「ええ、おぼえてます。 した気がするのである。 えっ、 と言い、 最初の前に「たぶん」と付けてしまったのは、 瀬田慎三もほし 田所さんは頷きながら、やや俯きかげんに梱包にかかり始めた。 田所さんは感慨深げにしばし間をおき、言葉を継いだ。 今日のなかでどれでも好きなの一枚持っていけ」 うん、 ほんとですか」 そうですか。 うん、 がったな。 君なら大事にしてくれるだろう」 前のときも、 だから前 前の個展のとき、

でも気にいっていたし、初めて個展に出したとき洲之内徹もほめてくれたんだよ。 「こっちのも中々いいことはいいんだが。だけどやっぱりこれの方がい の個展にも出したし、 今度も出した」 が これは自分 評論家

結局もう一つの絵は見せないままにしたので、私はまたほっとした。 ということは一九九十年だから、 田所さんは 前 の

たぶん最初のときも

私は田所さんの個展は一九六九年以来ほぼ欠かさず見てきている やはり以前に見た、 さすがに古すぎて確信がない から、 と感じたり言っ そ からだ。 の個展も間 たり

君はあのころから知っているから...」

結局、この絵は落着くべき所へ落着くのかもしれんな。うん、 そういうことなんだろう、

の風呂敷で画面のほうをおおい、ついでビニール紐で縦よこに縛っていくだけなのだが。 私はそれを手伝いながら、まだちょっと微妙な気分だった。 わずかな迷いがあるのだ。「よーし、先生、矢島先生、こうなったらあ 本当に貰ってい ح 11 いっても、 んたに絵をやろ いのかどう まず大型

田所さんが上機嫌の大声で叫んだのは、二週間前の月曜日だった。 場所は銀座のナントカ街のそば屋の二階だった。 この日は、 もちろん 近所 田所さんは の画廊

つきあっ は 田所さんより二十三も年下であり、 私は田所さんの目を見て問い返した。 てきた間柄なのだ。 二十四歳の青二才時代からずっと遥かな先輩として だいたい先生呼ばわり自体が気持わるかっ た。

わん」 だが、 田所さんは本気のようだっ た。  $\neg$ ああ、 ほんとだ。 どれでもやる。 百号のでもかま

私は目を瞠り、 ついで少しニヤついたかもしれない 顔でありがたく申し受け た

「それはありがとうございます。 つかあるんですよ」 じゃ あ どれにするかはあとで決めます。 好きなの は L١

どうぞ」

回個展もそうだったろうが、 田所さんはこの日よほど嬉しかっ そのとき予告した通りぴったり二年後にこうし たのだと思っ た。 十年間の沈黙ののちの久々の て開けた個

の句を載せたのである。 にあの茄子のカラー絵(実物は会場玄関のガラスケースに特別陳列してあった)と秋茄子 少し筆を入れ返送した。 もので、田所さんはその件に関しすでに一年近く前に手紙で丁重に依頼してこられ、私は 田所さんは自分の絵を私小説に擬して「私絵画」と呼んでおられるといったことを書いた る。それは抽象から出発した田所さんの絵が五十代に入ってからなぜ具象に転じたかとか、 いや、正確に言えば十五年前ある美術雑誌に書いた文章を、 そうして私はその個展のパンフレットに田所さんとその絵に関する文章を書 パンフレットはその文章を冒頭に載せ、 田所さんが再掲載したのであ ついで折り返しのページ い 7 ١Ì た

ので、 ある正木夫妻については、田所さんは前回のあとしばらくして仲たがいしたと聞い 待してのことだ。 かけつけた。 川田さんらが集まって話もはずんだし、田所さんも楽しそうだったから、今度もそう期 だからこの日は私も田所さんに大いに祝意を表そうと、 ほかの二人はなにかの事情ゆえかもしれなかったものの、 よけい気になった。 前回のときには文芸評論家の正木夫妻や秋茄子の句の俳人、それに有名画家 ところが、 今年は去年の顔ぶれは見えず、座が妙にさびしかった。 やはりウイスキー 私にとっても親しい間柄で を持って夕方 7 いた しか

他の客数名を誘って二次会へ繰り込んだのだ。 私はここはせめて自分がと思い、 ウイスキー を飲んではせい ぜ 11 賑 わ Ų 閉館 後 も

ささか酒で感情が増幅されがちな人ではあった。 ところへ酒が入って、 繊細な田所さんはそれに感じてくれたのか、あるいはそもそも個展初日で緊張していた すっかり高揚してしまったのかもしれない。 もともと田所さんはい

だから、 私は会期が終了した二、三日後、電話をしてみた

田所さん、 あの件おぼえてらっしゃ いますか」

すると田所さんは案の定言った。

えっ、 何でしたっけ?」

私はここが肝心だと思いつつ、 つとめて冷静に言った。

「どれでも好きな絵一枚やるとおっしゃったでしょう。 たより 百号でもい いとまでおっ

田所さんは、 ほん のわずかだけ間 をおいて答えた。

ああ、 あの件ですか。 なせ 確かに言いました。武士に二言はありません

居のリビングに掛けたいんです」 ぞには大きすぎますから、 言います。 いろいろ考えた結果、 例の茄子の絵を下さい。 朝顔の百号もいいんですが、 ぼくは来月引っ越しますから、 あれはぼく その新 、の家な

[所さんは一瞬沈黙した。 なな そう言うといいすぎかもしれな ١J が、 少なくとも前

間よりは確実にもう少々時間をおいてから、 覚悟したように答えた

いいですよ。 分りました」

その結果が今日なのである。

けてね」 こを持つとキャンバスが伸びて絵の具が剥がれたりすることがあるんだ。 あとはここを持ってくれ ればい いから。 キャ ンバスや中枠は持たないように。 それだけ気をつ

っ い。 どうもありがとうございました」

「では、 これで終りだ」

田所さんはそう言うと、 フッと肩で息を吐き、 掌をぱんぱんとはたい

飲みましょうか」

た髪は真っ黒だったから、あるいは髪を染めている最中だったのかもしれない。 い髪姿の六十代後半くらいの奥さんが氷桶と水差しをかかえて入って来た。 肩まで広がっ あけて居間の方へ出て行っ 私がウイスキーの封を切りだすと、 た。 そうしてまもなく手ぶらで戻って来、 田所さんは「そうだ、 氷が いるな」と呟き、 少し間をおいて洗 ドアを

から知られていた。 い人で、人前というか少なくとも夫関係のつきあいの場にはめったに関わらないとは、 たことがあったような気がするが、 奥さんを見るのは初めてだった。 確か来客も好きではないはずだ。 顔などの記憶は全くない。田所夫人はかなり個性の強 なない 厳密には二十年ほどまえ一度だけチラと見かけ

私は立上がって挨拶した。

ざいます」 お邪魔しております。 今度大事な絵を頂くことになった矢島です。 どうもありがとうご

すると奥さんはあまり愛想のない顔にほんの しばらくだけ意外なほどの笑みを浮べて

そうだそうですね。どうぞかわいがってやって下さい」

とゆっくり言い、すぐ視線を氷桶に戻すと卓上を少し整えた。 私はその姿を見ながら、

にこやかに言ってみた。 一度この種のことを聞いてみたかったのだ。

田所さんのような人と長年暮らして来られるとどんな気分ですか」

すると奥さんはチラとこちらを見、 向うで田所さんも「おや、 何を聞く」 という顔付

でまず私を、ついで奥さんを見た。

に答えた。 奥さんの表情は一瞬微妙に動いた気がしたがすぐ消え、 ちょっと間をおい て から無表情

「それは一言では言えませんわね」

そしてそのまま、私のほうも田所さんのほうも見ず黙って出ていっ

田所さんは「 ・をつい ははは」 だ。 と軽く笑い、 私はその答えはそのとおりだと思い ながら、 グラス

にウイスキー

は中々うまかった。 水割りにしても香りとコクがふわっと伝わって来、

きはいいけれど、 ようだし、 あとはほかだろうか。 ろよい酔いが軽やかに身をつつんだ。 んに趣味はなかったのだろうか、 トをしておられるのかしら。 犬も猫もおよそペットの類いは何も見当たらない そのとき、 田所さんは毎日この家でどんなふうに過ごしているのだろう。この部屋が七、 いろんな思いが浮んでくる。 旅行遠出の類いは二十年来ほとんど聞いたことがない。 田所さんが、 十年間沈黙されていた折はど 昔は街の酒場へよくでかけられたが、このごろはそれもあまりない 等々.. 私はもう一度アトリエを眺めわたし、 んなだったのか。 奥さんは今でもアル 個展でも控えていると

な。

田所さ

バイ

つ

いで庭を眺

あ、そうそう。 これを渡しておこう」

と、いくつかのちょっとした紙片を卓上に置い

何ですか」

尋ねると、 田所さんは

ちょっと...」 なに、小さなものにすぎないんだが、これとこれはぼくに関する文章でね、 それでまあ

と何やら羞ずかしげにもぞもぞ言って、まず二枚のコピーを示した。

ことまで入ってくるのかという気もしたからだ。 るのを読むにつけ、微妙な気分だった。嬉しいような気もする反面、生涯の集約にそんな 出会った映画観賞団体や、 ンフレット掲載文だった。 なかに出生からはじまって戦争体験、 見ると、その第一は「画業周辺」と題された田所さん自身の文章で、 その後の交友関係など、つまりは田所さんの生涯がさらりと記された、前回個展のパ 私はそれを改めて読み、 その後その流れの有志が作った親睦団体のことまで書かれて 所属美術団体の変遷・脱退、六十年安保闘争時 中に私と田所さん正木さんらが初めて ほん の の体 ジの しし

しては珍しい強い表現もある内容だった。 委員田所泰夫氏のあいさつ抄録だった。写真・見出し等を除けば半ページ分の短いものだ 文末近くには「軍国主義復活の傾向に打撃を与えねばならない」といった田所さんと 次の一枚は一九七十年八月の朝日ジャー ナル誌の一ペー ジで、 八 ・一五集会実行

岩波の『 まあ、それでこんなものもあるんだよ。これは他人(ひと)のものなんだけどね、 そして、私が初めて読むその文章を「 図書』でたまたま見つけたもんだから、その...」 ヘーえ」と眺め直していると、田所さんは、「 去年、

入ると栄養失調で周りの者がつぎつぎに死んでいった...、 験が綴られてい 山県・無職・七四歳」の人の投稿文で、昭和十九年中国戦線での兵士としての苦しい体 とまたもぞもぞ言いながら、 その文末に田所さんの字で、 た。 炎天下の行軍中人事不省で倒れ、 別の一枚を示した。それは「背嚢の中の本」と題された「 これは自分とほぼ全く同じ場所同じ状況である旨、 やがて血便を出し始め、 というリアルな描写だ。 野戦病院. そうし 昨年 I

らいことです」 ぼくは同時に侵略軍の一員でしたから、 日付と署名入りで記されていた。 読み終って私が「うーん」と言っていると、田所さんが付け加えるように言った。 数えると田所さんはこの 人殺し以外はたい がいのことをやりまし 人より三歳年下であ

つ

私はまた「うーん」 と言ったきり言葉が出てこなかっ

その私に田所さんは最後の一片を渡し

いえば、 があるのか..。 エポックをなす作なのか、それとも田所さんはこの時代のたぶんまだ抽象だった絵に執着 この絵葉書を見せたのかを考えた。これは田所さんの代表作なのか、 ないので結局全体像はよく分らなかった。それよりむしろ私は、 いた具象のようにも見えたし、それをモチーフにした抽象のようにも見えたが、 下に「一九六九年 田所泰夫個展 それはコピーではなく古い絵葉書で、半ばセピア色化した写真版の絵が一枚横長にあり、 私が見た最初の田所個展である。 真昼の渚」と刷り込まれていた。 私はその絵をじっと見た。 なぜ田所さんがわざわざ 絵は海辺の風景を描 あるいは 一九六九年の個展と 記念すべき 色が見え

はこれしかないのかもしれないという考えも浮んだ。 けれども、 結局それはよく分らなかっ た。 それより、 ひょっとしたら自分の 絵の絵葉書

「とにかく、これ、持っていってくれたまえ。 まあ、 絵の付属品だ」

かこの四枚プラス私の小文が、 田所さんはそう言って、四枚の紙を重ねて私に手渡した。 田所さんに関する全主要文書のような気さえした。 受け取り ながら私は、

個展の結果はどうでしたか」

私はそれらをしまってから、 話題を変えるつもりで聞 ίĭ

すると田所さんは、 ちょっと目をまたたいたのち答えた。

かった」 ああ、 まあまあだった。 いろんな人がそれぞれの気持で来てく れたし ね 反応も悪くな

「じゃ、 売れました?」

つい私は聞いてしまった。

それは...。 まあ、 そういうもんですよ」

田所さんはちょっと悲しげに、 しかし出来るだけさりげなく答えた。 私はしまっ

いながら、二度うなずいた。

そうそう、 三日目に正木さんが来てくれたよ。 夫妻でね

田所さんが今度は自分の気分を変えるように、 意外なことを言っ

そりゃあよかったですねえ。 こっちもほっとしますよ」

うな呆れたような気分でいたのだ。 来ずっと身近に接してきた大先輩だったから、 本当にほっとしながら言った。 なにしろ両者は私にとって青年時代同時に出会 二人の間の突然の確執には実際困っ

秋茄子

夫 このいきさつについて私は双方おと と叱り捨て、ステッキをふりふり道 と叱り捨て、ステッキをふりふり道 と叱り捨て、ステッキをふりふり道 と叱り捨て、ステッキをふりふり道 とれに対し敬意が足らん」 が一種の文人画展として開催したとこ

てあの人、一体どう言ったと思う? もほめていってくれたし、まずはよかったよ。といって何もかも氷解したという訳でもな が : : なにしろ正木個人もそう単純ではないし、 まあ、 皆さんにも心配かけてたのかもしれんが、 それにあの女房が権高くてねえ。 ともかく向うからやってきて絵

まったくそういう言葉ってのは..。 ぼくに向って、出入り差し止め、 つ て言ったんだからねえ。 出入りだよ、 出 را

ま、要するにぼくが正木家へ長く行きすぎたんです。 それに尽きます

私はまた頷いた。ただし今度は微かに困惑を秘めながら。

たろう。 はあれ田所さんにはちょうどいい小遣いになっていたのではとも思う。 生となっていたのだ。家もすぐ一駅隣だし、年に一度、銀座の貸画廊で展覧会を開く会は、 いつもなごやかでいい雰囲気だった。 田所さんは確かに長年、 正木さんに頼まれ、月に二回、夫妻をはじめ奥様族などアマチュア七、八人の先 正木さん宅へ絵を教えに行ってい 田所さん自身も楽しそうだったし、 た。 たぶん十数年は越えて それに. にわずか

が一種の文人画展として開催したところ、たまたま小品が売れただけなのに、 したらしい。正木さんはもちろん素人だが評論家としては有名人のため、 らく前正木さんの絵も大阪の展覧会で二枚売れたとか言ったあたりから、 たあと、 揚々と胸はって現れ、先の個展に出した大作が一枚、二百万だか三百万で売れたと披露し んの奥さんに向って鼻先へステッキをつきつけ、 ところが、前回の田所個展のしばらくのち、正木さん宅でたまたま開かれ なるものの際に、 酔うにつれ自分こそが真の画家だと言いつのり、正木さん当人だか誰だかがしば 突然トラブルが発生したのである。 そうして田所さんは帰り際、 なんでも田所さん 玄関へ送りに出た正木さ ファンの画廊主 ぷりぷり怒りだ が たお鮨パー これが田所 珍しく意気

で、これに対するリアクションが先の奥さんの「出 り道の真ん中を大外股で帰っていっ 入り差し止め」 宣言であ たというのである。 ĭį これを

田所さんは今回の個展の文章に関する電話の際にも、 きさつについて私は双方および事情をよく知る第三者からも聞かされ た のだが、

もきれいごとそうな顔をしているが、 な下手な素人の絵が二枚も売れるなんて、とにかく間違って あれで一筋縄ではいかな ١١ よう。 ιÌ ą 気をつ せ な けた方が が正木

とはあったからだ。 うでもいいような素人や有名人というだけの本が売れてい とでもあったが、 などと呪咀を言いつのっておられた。 気持はどこか分る気もした。 それは第三者にはつい笑い出したくなるようなこ 私も自分の本がちっとも売れな たりすると、 似た感情を抱くこ ĺ١ のに、

年齢なのだ。 けれども、 田所さんと正木さんは二十数年来のつきあいであり、 二人とも七十 くつの

仲良くお願いします」 とにかくよかったです ą́ 正真 ぼくら周囲の者もほっとしましたよ。 まあ、

私が笑いながら言うと、田所さんも少し笑って答えた。

させ まあ、 そうするつもりではあります」

ともに急に賑やかになってきた。 それから私達はまた少し飲んだが、 しかもそれはどんどん近づいてくる。 やがてもう薄暗くなっていた窓外が鉦や太鼓の音と

お祭りだ!」

い気もしたからだ。 私は叫んだ。 元来そ の 種のものは好きでもあっ たが、 なにやらこの場にちょうどふさわ

だが、 田所さんは何が面白いのかというように言った。

隣の神社のだよ。毎年うるさくってね。ぼくはもう何年も見たこともない 私はかまわずサッシ戸をあけ、サンダルばきで庭へ出て下の道を覗いた。 ょ

IJ 自体も揺れていた。木造二階建程度の家に挟まれた狭い道ははっぴ姿の人と神輿でうずま いに揺れていた。 たくさんの提灯に囲まれ神輿がやってくるところだった。 にわかに繁華な町みたいに見えた。 それに合わせ「わっしょい、わっしょい」の掛声があたりに満ち、 古びた金色の神輿が道い 空間 っぱ

私はそれを上から見下ろしながら、言い知れぬ郷愁のようなものを感じた

私は通り過ぎてゆく神輿の掛声を聞きながら、田所さんに言った。

はたまには見るものですよ、こんなに近くにあるんですから」 行きましょうよ、田所さん、 見に行きましょう。 たまにはいいじゃ ありません ゕ

むなく言った。 そう言いながら私がもうすぐにも部屋から走り出しそうにしてみせると、 田所さんもや

行ってみるか。 せっかくのお客さんのお誘いだから」

たん、 と音立てて一瞬開き、 に面してもう一つこちらと鍵形をなしていた部屋の、 私と田所さんは卓上をちょっと片付けたのち、部屋を出ようとした。 カーテンはまたすぐ閉まってかすかな揺れだけが残った。 なんとなく違う気がした。 誰かがこちらを見たような気がしたが、私がそちらへ目をやったと 閉めきりだったカー テンがキリ 私は奥さんかなとも思っ と、そのと

い合いとなった。 元や氏子の長老連がならんで神輿の最後の揉みを観閲 澄明さと合って中々よかった。 神社の 境内は人で埋まっていた。 上手も下手もあっ たが、 幔幕をはった拝殿には参拝者が絶えず、 甲高い声が夕闇に響いていくさまは、 ついで木鑓か甚句ようの唄の競 神 -楽殿 の空気 Ī は地

まり楽しげではなく、「あの連中、 ての見物だったが、 私と田所さんは拝殿の柱の脇に立ってそれらを眺めた。 長身の田所さんは境内を悠然と見下ろすごとくにしながら、 すぐ警官みたいな恰好をしたがる。 背の低い私はときどき爪先立っ 日本人は制服が好き

しかしあ

あれは伸びの調子のとりかたがむつかし とガードマン風の自警団につい てぶつぶつ言ったり **いんだ]** してい た。木鎗につい てだけは時折

家の出身だったせいかもしれない。 などと少しは笑顔を見せて言ったりしたのは、 ある 11 は田所さんが東京府下青梅在の商

を眺めたりしていたが、 私はそれにしてもなぜ田所さんはこん まもなく田所さんが なに華やぎを嫌うのだと思いつつ、 横顔や後ろ姿

もう行こうや」

と言い出したので、 神社を出た。

った。もうとっくに夕食時だったが、 そうして私たちは田所さんの案内で川伝いの道をぶらぶら歩いて、 てそうしたのである。 家へ戻ってもとても食事は出そうになかったせい 駅近くのそば屋へ λ

たちはそこで板わさに酒を注文し、一献始めた。 田所さん案内のそば屋は、 玄関先に植え込みなぞのある新 しくて中 Ż ١Ì い店だっ た 私

たせいか燗酒がやはり身にここちよかった。 酒は二合用の腰の丸いとっくり入りで、 格別い ľ١ わけでもなかっ たが、 それまで外に しし

いやあ、 ぼつぼつやっぱりこれだねえ。もう十月だもんなあ

した。 田所さんもそんなふうに言い、 だいぶ上機嫌になっていた。 そしてこんなことを言い

かねえ」 今のうちを作るとき金も出し合って一緒に住みだしたのよ。 母親代りみたいに育ったところがあってね。 いくつもちがうんだけど、僕は一人だけ年の離れた末っ子だったもんだから、 人だから。 「近頃はこの先の暮し方のことを考えたりしてねえ。 さっき出がけにちょっと気づいたかもしれないが、姉がいるんだよ。 それに向うはずっと独りのままだったんで、 もう年だし、 もう八十五だ。 うちは年寄りば どうしたもん あれを半分 かり三

ばらくからだから、 妙な家族構成だと思えもする。 もしれないから、 私はそうか、 あれがそうだったのかと思いつつ、 奥さんもよく辛抱したものだし、 四十年程も同居の計算になる。 それにしても田所さんは子無しの ひょっとしたら新婚直後からだったか ちょっと考えた。ということは戦 後

なるほど、 末っ子ですかあ」

分っているとでもいうように少々気恥ずかしげに笑い 私が何となくいろんなことが分った気がしてニヤつい ながら口を継いだ。「それでまあ、あ ていると、 田所さんもその意味を

るんで、 んとは二好さんともども小学校時代以来の幼馴染みである。 の句の俳人で、 さんの実家暮しですよ」 て家屋敷ともとられちゃったんだよ。 の前からの家屋敷を売って新し とで抜本策を図ったんだが、これが四橋の方なんか大変なことになっちゃったんだ。 れこれ考えてはみるんだが、 夫婦ともすっかり信用して委任状渡しちゃったらしい 前回の田所さんの個展の際には顔を合せてしばらく 私は驚いて四橋さん 中々むつかしくてねえ。最近、二好と四橋も相次いで家のこ い家に替えようとしたんだが、 なんでも俳句好きだと言ってちょくちょく出入りす の顔を想い浮べた。 んだね。 やくざみたい 四橋さん 一緒に飲 だから今、 h は な男に騙され 例の だ。 彼は奥 田所さ )秋茄子

うしん

唸っていると、田所さんは更に口を継いだ。

よねえ」 くにもショルダー 売った一億くらいの金の入った預金通帳を、 「そのせいか、もう一人の二好の方は、去年やっぱり青梅から東京へ家を買い バッグに入れて、ぐーっと握り締めて離さなかったというから、 新し い家と引き換えになるまで毎日どこへい 替えるとき、 面白い

たかと思うと、 ではぼつぼつ長老のうちでもあろう。 私は今度は吹き出し 自然、 笑い た。 二好良一郎と がこみあげてくる。 その人がどんな顔をしてそのバッグを握り締め こいえば かなり名を知られた詩人なので かねがね貧乏詩人として有名でもあった人 あ そ い

「緊張したんでしょうねえ」

「だろうねえ」

私たちはもう一度笑った。

そうしてその笑いの後半へ田所さんが言った。

んだねえ。 「だけどねえ、そうまでして手に入れた中野の家というのが、 新しいには新しいけど、 新建材ばっ かりの建売りで Ą ちっぽけなもんなんだよね このごろは あ んなも

だから、 どうもぼくは面倒なことまでしても、という気がしちゃうし

重いばかりだ、 どの金額にちが 今や土地代だけでかなりの額にはなるだろう。それは正直、 私は田所さんの言わんとすることがおおよそ分った。 第一、そも別に行きたい所もな いない。 いない。 が、ではそこを売ってどうするとなると、 といったところだろう。 田所さんの家も、 田所さんには目の 今更億劫 売 れ というか気が ば場所 飛 び出るほ がら

で、私はちょっと考えてからこんなことを言ってみた。

と聞いたことがあります。 たです。 田所さん、今の所を動かずに家だけ新しくする方法も多分ありますよ。 敷地を担保に金を借り、 ぼくも詳しくは 知りませんが、 食事なんかもこのごろじゃ、 家を改築したり老後の生活全般のケアを受けると 一部の信託銀行などでそ 毎日中々気のきいたものをきちん んな方式を扱っ 産信 Ū ている いうやり 託と しし

夫馬

と定時に配達したりするらしいですよ」 田所さんはじっと聞いていてから言った。

私はつとめて明朗に答えた。 そういうことは少し聞いたことがある。 でも、 その借りた金はあとどうするの?」

うです」 財産はあの世へ持っていける訳じゃ 「それは死後清算でしょう。余った場合どうなるのかはよく知りませんが。 ない でしょう。 — 度、 信託銀行 (へ)間 いてみられたらど しし ずれにしろ

田所さんはまたじっと考えてい てから、 呟くように言っ

うん 聞いてみる。 信託銀行か」

それから私はお代わりした銚子を田所さん の盃に向け た。 田所さんはそれをゆっ く り 飲

「ところで」

と自ら調子を変えた。

なんです?

腺があるからダメなんだが、それはそれとしてちょいと眺めたりつきあっているだけで悪 医さんが現れてね。これがふんわりして中々色っぽい ないんだよ。 女のほうのことだがね、 いやあ、 いつまでたってもこういうことは尽きないもんだねえ」 このごろはからきしだめだっ んだよ。ま、セックスのほうは前立 たが、 最近ちょっと い女

いうものはいつまでたってもこういうものらしい。 そうだが、 からだ。 私は笑いながら田所さんらしいと思った。 ただし今回の話ははたして実態はどのていどなのか。どうも何割かは増幅があり ひょっとしたら本当なのかしら。 昔から田所さんはこの種のことが好きだった それにしても田所さんの言うとおり、 人間と

人間って面白いもんだよなあ

田所さんも何を考えていたのか、 タイミングよくそう言った。

んはきちんと礼を言われた。 私たちはそのあとざるそばを食べて、店を出ることにした。 私は絵をただでもらったことを改めて思い、 勘定を私が払うと、 ひそかに恐縮し 田所さ

ゆっくり登り、 神社の祭りももうほぼ静まっており、 ふつうならここで辞すべきところだが、 私は絵をうけとるために田所さんのあとにつき一緒に玄関へ向った。 隣の田所家はさらに静かだった。二人はあの石段を 私は絵があるのでまた一緒に元の道を戻った。

そして田所さんがドアを開け意外に若い調子で「ただいまー」 いたあの部屋の方から突然、 と言うと、 出がけにカー

おかえり

な 待ちかねたというように田所さんに向って走ってきた。 華やぎに満ちた声がし、 満面笑みの一人の老女がい かにもいとおしくてなら

基彦

そうして私を認めると、「あっ」と声を上げ、 身を翻して一瞬のうちに元の部屋 へ消え去

った。

我に帰ると、 私は目を瞠ったまましばし立ち尽くし、 あとは出来るだけさりげなく振舞い、 田所さんは困惑し 絵をもらって辞去した。 た表情で黙って しし た 私は

宅で、 それから九ヵ月後の先だって七月、 折から正木さんの早めの新盆を兼ねて開いた正木さん追悼連句会の席だった。 私は久しぶりに田所さんに会った。 場所は正木さん

画を描いているからと、 田所さんも誘ったのだ。 前連句好きだった故人を偲んで、いつも集まっていた故人の離れで歌仙を巻こうと企画し、 つまり正木さんは亡くなっていた。この四月に癌で逝かれたのである。 それを持参して下さった。 田所さんは連句には縁はなかったが、 ちょうど正木さんの肖像 で、 この日は生

さな仏壇前に立ち、丁寧な包装を解いてその絵を仏壇の右脇に掛けた。 集まった十人ほどはまず、折から正木夫人が入院中で誰もいなくなった母屋の新し L١

顔と花を浮き立たせ、中々風情があった。 えに例によっ さんがやはり左側へ視線を向けている図だった。顔と花以外はまだ未完成で、 絵は二十号ほどで、左斜め上部に一花の白木蓮が枝に咲き、中央やや下に背広姿の正 て大半が茫漠と霞んだごとき感じだったが、 それがかえって丁寧に描かれ 色も薄いう 木

題は白蓮居士というんだがね。まだ途中だから本当は見せたくない気もしたんだけど、 新盆だというし...」

答えた。 田所さんが例のごとくもぞもぞと気恥ずかしそうに言ったので、 世話役でもあっ た私は

しているところも単純ならざる感じがして面白いですね」 なない ちょうど幽霊みたいでいいですよ。正木さんが本当に出て来たようです。 横目に

だったのだが、 最後の「単純」云々は、いつか田所さんが正木さんに関して言ったことを受けたつもり 田所さんはそれに気づいてかどうか得たりと頷い た

から白蓮ととりあわせてね...」 「そうなんだよ、 そこんところが出したくてね。 ま、全体としてはきれ ίì な人だっ だ

案外明るく、別に屈折はなさそうだった。その顔を見ながら、 そして田所さんはこれもいつものごとくではあるがちょっと目をぱちぱちさせた。 伝え聞く田所さんの言動を想い起してい た。 私は正木さんが亡くなった

遺体の前に詣でるとそのままほとんど誰とも口をきかずまっすぐ帰ってしまったのである。 すなわち、 伝え聞くというのは、実は私はそのころ田所さんとは一度も顔を合わせなかっ 田所さんはまず、 正木さんの亡くなった晩の仮通夜にやや遅めに現れ、 たからだ。 離れの

中々現れないから様子を見に庭へ出ると、田所さんはもうとっくにいなかっ 母家のほうで他の客とともにいた私は、 田所さん来訪の報に席をあけて待っ ていた の Ę

というかその前後、田所正木両氏共通の古い友人宅へ酔って電話をしては、 いたそうなのである。 そして二日後と三日後にお寺でもたれた正式通夜と葬儀にはついに姿を見せず、 さめざめと泣

少々たっての田所さんが今、 ほんとに困っちゃうわよ。 私はそれを聞いていかにも田所さんらしい反応だとも思っていたが、 とは、その友人ばかりか自分までずいぶん聞かされたという友人夫人の言だった。 あの人、 目の前の様子なのだった。 もともと泣き上戸ではあったけど」 それから1 |ヵ

二好さんも正木さんのほんのしばらく前に亡くなっていたのだ。 ぼくはこの間、 田所さんは誰にともなく言った。私はそれを聞いて、あっ、そうか、 肖像画を二枚描いていたんですよ。もう一枚は二好のです」 と思っ た。 かに

そうですかあ

誰かからそう呟きが出、 しばらくみんな沈黙した。

それから私たちは絵を持って離れへ移り、 絵の前で連句を巻い た

けたりしながら、 田所さんは窓際真ん中にどっかり座り、時折り絵や正木さんとの交友に関する質問を受 ちびちび酒を飲み、 だんだん上機嫌になっていった。 途中、 誰か

褌しめていざ出陣す

という多分に諧謔的な短句に付け、

玉ノ井はいづこと向島を見る

あまりにも直截的かつ感覚が古すぎると批判され、 だいぶ苦吟ののち二、

あとになって、田所さんをよく知る連衆の一人から冗談半分、

田所さん、これでどうです。 肥って還る敗残兵」

と言われると、 手を打って、

あ、それがい い、それでいい」

とまるで自尊心も何もなく、 そのままただ「敗残」と「兵」 間に字数合わせに「

の字だけを入れ、 自分の句として通してしまった。 そうして、

あのときは実際そうだったんだよ」

と、少なくとも私たちが知るかぎり昔も今も肥っている体を揺らめかせた。

いた。 像しつつ、 私は以前もらった文書にかんがみ、 田所さんはひさびさに大勢とこんな場にいるの いくらなんでも当時はもっと痩せていただろうと想 が楽し ١J のだと思って、 黙って

それからさらにだいぶ経ったころ、 田所さんはかなり酔った様子で

この絵、 今日持って帰るのしんどくなっ たな。 どうしょう」

となんとなく私のほうを見て言った。

夫馬

せん。奥さんもまだ見てないし。それであとで取りに来られれば」 「ここに置いておかれても構いませんよ。お盆の間ぢゅうくらいちょうどい ľ١ かも しれま

私がそう答えると、 田所さんは安心したように言った。

よし、そうしよう。 さあ、これで飲める」

そうして田所さんはさらに愉快そうに飲み続けた。

とどもだ。 て語ったか、己れをまっとうしたか、 うち、正木さんの人物論になった。正木さんがいかなる人であったか、 こうして連句は六時間近くも続いたのち巻き終えたが、 孤独であったか、実りある人生だったか、 打ち上げにまた少し飲ん 本当に胸襟を開い そんなこ んでいる

も入院してしまい、こうして書斎や居室を守る人もいない。 たふしがあるし、 世間的には有名人でありまずまず成功者だったが、 イフワークだった最大の作品は未完のままだったし、子供もなかったし、 それはそれぞれに意見はあったが、 実際、 はたから見ていてもずいぶん孤独の相をしばしば見せられた。 中々他人には断定できないことだった。 当人は必ずしもそうは思ってい 亡きあとは老妻 正木さんは なかっ

た 結局、 一通りの議論ののち、 ふと間合があいたが、 そのとき突然、 田所さんが言い

「ああ、 絵はこんな所に置いておけない。 俺は持って帰る」

そうしていきなり絵をつかんで部屋の端へ行くと、 誰かが何か言っ たのに対

なない 物理的問題じゃない。 精神的問題だ」

その田所さんの顔はかなり歪んでいたので、 と言い捨て、 持って来たときの紙やビニール類でただちに包装しはじめた。 私は田所さんが何を考えたのかと推し量ろ

うとしたが、そのとき田所さんがぼそりとこう言った。

おれは絵をかき続けたいんだよ」

それからまもなく、 田所さんはみんなと一緒に外へ出ると、 左手に絵を提げ右手で杖を

ひきひき、 少しうつむきかげんに帰っていかれた。

17